1000ページ読破記　☆佳作作品☆

私の「乙一（おついち）」感

2年E組　村河　智子

「え！？まさか…嘘…。」
久々の衝撃だった。決して過剰表現ではなく、本当に「やられたっ！」という感じがした。こんな本に出会ったのは二歳の頃から十七歳までにたくさんの本を読んだ方だと思っている私にとって新鮮な感覚でした。「GOTH　リストカット事件」。悔しいけれどもう一度読み返す羽目になりました。これが『乙一（おついち）』との初めての出会いでした。出会いは高専の図書館の新刊コーナー。感謝。
おかげで「GOTH」に始まり本屋でありとあらゆる『乙一』の本を手当たり次第に読む羽目になった。『乙一』は「暗黒系」とか、「ミステリ作家」とか、「切ないものを書く人」とかなどかなりジャンルの幅のある作家だ。そのなかで私の好きないくつかの話を挙げてみる。
「夏と花火と私の死体」。これはなんと乙一のデビュー作で十七歳の時の作品である。執筆は十六歳だった。でもこの作品は全く作者の年齢を感じさせない。二人の子供が死体を隠す、隠すとみつかりそうになる。それでまた移動させる。「私」の死体。このサスペンスの演出は実に巧みである。サスペンスの文法を完全に押さえて、緩急の付け方、緊張の作り方、緊張を解くタイミングには感心するばかりだ。特に、殺された「私」の、すなわち死体の、一人称で書かれている部分が不思議なこの小説の魅力となっていると思う。
次は「暗黒童話」。これは『乙一』にしては珍しい長編小説。『乙一』の話は比較的短い話が多い。いつも「もったいないな…」と思いながら読んでいた。片眼を失った少女が、眼球移植を受け、記憶喪失になった。そして、時折激しい痛みと共に見知らぬ映像がよぎる。その映像の源を求めて旅立つ少女。その映像の意味とは……。という「ミステリ」でもあり「暗黒系」とも言える内容は長編を感じさせない、一気に読める。『乙一』らしさがある一冊。一冊で二倍おいしい。入門編とも言える。
もう一つは最新作。「ZOO」。この作品はそれまでに私が持っていた小説の概念・『乙一感（観、ではない）』を遥かに超えていた。それでいて、新鮮。この本については深くはふれないが、読んだらわかる、これもまたお薦めの一冊。
この夏、『乙一』に出会い、大半の作品を読んだ私は、一冊一冊がすべて新鮮で、何故、この人は「ヘンな話」を書くのか、なぜ私をこんなにも惹きつけるのか、まだ私にはわからない。ただ一つわかることは、乙一の謎を解こうとする私と読者の想像を遥かに超える話を書く『乙一』との関係、「作家VS読者」（？）という対決はまだまだ続きそうなことである。

（むらかわ・ともこ）

「夏と花火と私の死体」　集英社
「暗黒童話」　集英社
「GOTH　リストカット事件」　角川書店
「ZOO」　集英社
外7冊　計2,914ページ

読書感想文　☆佳作作品☆

「連戦連敗」を読んで

4年C組　田邉　泰子

私は、幼い頃から「建築」というものに、興味を持っていました。高専へ入学しようと考えたのも、将来は、建築・土木関係の職に就きたいと思ったからです。
私の家は、築百年以上経つような、古い家です。ヨシブキの屋根に、ふすまで仕切られた、畳ばかりの部屋、庭は純日本庭園といった感じです。まるで時代劇や日本昔話に出てくるような家です。
それに比べ、友達の家はというと、新しく奇麗な家、かわいい花や芝生の生えた庭でした。そのため、友達を家に連れて来るのが嫌で、コンプレックスとなっていました。そして将来は、友達のような家を、自分で建てるのだと、かってに決めていました。そのころから、建物に興味を持ち始めていたのだと思います。
しかし、小さい時は、建築家という職業も知りませんでしたし、修理などで家に来ていた、大工さんが全てをやっているのだと、思っていたくらいです。
中学生の時、「世界の安藤」と言われる、有名な建築家が「直島」に美術館を設計し建っていることを知りました。実際に訪ねて驚くことばかりでした。「建築家ってすごい！！」「建物を作るのってすごい！！」と、ただただ感心し、心の中にいつまでも何かわからない物が、残っていたように思いました。
私は４年生になり、将来について、少し考えるようになりました。今回は、専門関係についての本を読もうと思い、図書館でいろいろと本を探しました。
安藤忠雄の名前を見つけ、「連戦連敗」という本にひかれて、読んでみることにしました。建築の世界で成功し、いろいろな建物を設計して、東大の教授もされている人が、何に負け、どんな苦労をしているのだろうか、とても気になりました。
私は、建築に興味があると言いながら、建築家がどんな仕事をしているのかについては、全然知りませんでした。クライアントから依頼があり、ある一定の条件を満たすよう、自分が思うように設計し建てていると考えていました。
しかし本を読んでみると、現実は厳しく、たくさんの建築家に混じって、コンペを戦わなくてはならないそうです。もちろん、一番にならなくては、自分の考えは採用してもらえませんし、どんなにすばらしい設計を提出しても、審査員や社会の情勢によっては、選ばれないことがあるそうです。私の考えは甘く、物作りの大変さを改めて知りました。
どんなに一流・巨匠と呼ばれていても、コンペで勝ち続けることはできませんし、負けることが多いくらいでした。それでも挑戦している彼らは、強いなと思いました。それが彼らの職業だと言えばそうですが、選ばれなければ、きっと自分を否定されたような気持ちになるはずです。挑戦し続けている彼らは、本当に偉いと思いました。きっと物作りが好きで、自分の作品をたくさんの人に利用してもらい、いろいろなことを感じてもらいたいという気持ちが、誰よりも強いから、続けられるのではないかと思いました。
最近では、環境について盛んに言われています。私も授業で習っているので、少しは分かっているつもりでした。リサイクルなどは言うのは簡単ですが、取り入れていくのは難しく、高コストになりがちで、嫌われてしまいます。また日本は、無計画に作られた街、都市が多く、いろいろな問題を引き起こしているそうです。こういった問題にも、積極的に取り組んでいかなくてはならないのです。私は、外見の美しさばかりに、目が向いていました。しかし本当は、そういったことに配慮している方が重要なのだと感じました。
安藤さんは、建築ばかりでなく、いろいろなことを学ぶべきだし、仕事をしていても、学ぶことがたくさんあると書いていました。私もその言葉を見習い、たくさんのことを経験し学んでいかなければいけないなと、改めて思いました。そして、自分に自信を持ち、彼らのように、どんなことにも挑戦し続けたいのです。

（たなべ・やすこ）

著者　安藤忠雄
書名　連戦連敗
発行者　財団法人東京大学出版会